

忙しさとむなしさと

太田 茂行

編集の方からいただいたテーマを心の中
でころがしていると、一学期の忙しかった
こと等が思い出されてくる。しかし、ふと
「子どもたちは忙しいとかむなしいとか感
じるのかしらん？」という疑問が湧いた。
「忙しさとむなしさと……」ということを
小さな子どものテーマとして見直してみる
のも面白いのではないだろうか。

感じているのだろうか。そこで私も含めて
三人の仕事仲間で「いつ頃から忙しいと感
じるようになったか。また、むなしいとい
う気持を感じるようになったのは大たいい
くつ位からか」ということで話し合ってみ
た。すると、忙しいという感覚はどうも成
人に近づいてからのものらしい。また、む
なしいという感覚は個人差はあるが、忙し
さを感じるより以前に味わりようになって
いるようだ、というように話がおちついて
いった。しかし、最近の子どもたちは小学校

の低学年生や幼児でも「いそがしい、いそ
がしい」と言う子ども多いようだ。いったい
これはどういうことだろうか、と話し続け
ているうちに次のようなことが出てきた。

(1) われわれ(小さい子ども)は「自分
からしたいこと」ではなく、「するべ
きこと」「他人から要求されているこ
と」を次々にしているときに「忙しい
なー」ととくに感じるようだ。

(2) 近ごろの子どもたちは自分のしたいこ
とに熱中できる時間が減り、「するべき

こと」「親・先生などから要求されること」をする時間がふえているのではないか。それで「忙しいナー」と感じる子どもが多くなっているのではないか。

(3)「するべきこと」と取組んでいる時でも、そのこの意味が自分自身に感じられるときは、忙しき、大変さは感じてもむなしさは感じない。しかしその意味が見出せないときは、疲労感ともむなしさを感じるようだ。

(4)「するべきこと」の意味を自分なりにとらえられるようになるのは、一般に青年期以降のことであろう。それ以前には、「自分のしたいこと」に熱中できる時間をたくさん持った方が、成人以後の創造的活動にプラスなのではないか。

(5)小さい時に感じる「むなしさ」は、主に自分のしたいことがうまくできなかつたり、見つからなかつたりする時の

イライラした気持・つまらない気持や、興味を持ってないことを他人から押しつけられた時の不快感・心理的抵抗から生じるのではないか。

(6)小さい子どもの感じる「むなしさ」は「何かつまらないナー」「どうもこれではないヨ」「何か足りないナー」といった感覚に根ざしているようだ。これは、より自分自身であろうとする意欲、(私はこの意欲は人間にとって本質的なものと考えている)の裏返しと考えられる。

(7)小学校・中学校と進み「自分のしたいこと」を十分に追求できないうちに「するべきこと」、「要求されること」の量が一方的に増えると、「むなしさ」を感じる暇さえなくなり、「忙しい」という表面的な感覚が早くから強まるのではないか。こうして、いわば未成熟の「むなしさ」を「忙しい」という

感覚で包みこんだまま育っていくと、何らかのきっかけで「自分が何なのかわからない!」「生きている意味がわからない!」という自己喪失感・虚無感にとられすぎてしまうようになるのかもしれない……

とまあ、以上のようなことを話しあったり考えたりしたのであるが、どうも話がむづかしくなってしまった。しかし「忙しさとむなしさ」はおとなだけのものではなく、小さな子どもたちにも関わった問題であることは否定できないようだ。

自分が今出会っている子どもたちには、おっとり、のんびりした幼少年期を送ってもらいたいとつくづく思う。それにはやはり私自身が、はりのある生き々とした気持でのんびりと仕事をするのだらう。あの先達の残した「元氣・根氣・のん氣」という言葉をもう一度かみしめてみよう。

(愛育養護学校)